

太宰治「トカトントン」について

小嶋 孝三郎

1

太宰治の短篇「トカトントン」は昭和二十二年一月「群像」紙上に発表された書翰体の小説である。その創作のきっかけとなったものは、たまたま作者が一読者から長文の手紙を受け取ったことに始まる。今その実際の手紙の内容は知り得ないが、作者がその読者宛に書き送った数度の返信を通じて、その間の事情を尋ねてみることにしよう。

○第一信（昭二一・八・三一、青森県金木町津島文治方より水戸市西原町三七〇番地吉村トミ方保知男二郎宛ハガキ）

拝復貴翰拝読仕りました。長い御手紙に対して、こんな葉書の返辞では、おびたしい失礼だけれども、とにかく挨拶がはりに、これを書きました。出来るだけわがまま勝手に暮してごらん下さい。青春はエネルギーだけだとヴァレレイ先生が言っていたやうです。不一。（太宰治全集、第一一巻、三九八頁、書簡543）

○第二信（昭二一・九・二一、シ）

拝復 前便もまた、いまの御便りも自分にはたいへんよくわかるやう

太宰治「トカトントン」について

な気がしました。このやうな生きかたは、つらいものです。私は、キリストをさへ、うらんだ事があります。

君も、味方をひとり得たわけだから、おつとめのひまには手記をつづり、まとまったら、送ってみて下さい。御自重を祈る。不展。（ク四〇一頁、書簡548）

○第三信（昭二一・九・三〇、シ）

拝啓 御勉強、御努力中の事と存じます。こんどの仕事の中に、いつかのあなたの手紙にあったトンカチの音を、とりいれてみたいと思っております。（また、とりかかってあませんけどももちろんあなたの手紙をそっくり利用したり、そんな失礼な事は絶対にいたしませんから。また、あなたに少しでも迷惑のかかるやうなお願ひしませんから。トンカチの音を貸して下さるやうお願ひします。若い人たちのげんざいの苦悩を書いてみたいと思っております。）（ク四〇六頁、書簡558）

傍線を施したところに、作者のねらいがあることが解る。

昭和二十一年九月と云えば、敗戦後約一年を経過した頃である。その当時の若い知識人の苦悩とは一体どういふものであつ

たろうか。

敗戦を契機として社会の全面に起った大変動は、長い戦時下に圧えられていた一さいのものを悉く解放した。廃墟の東京にバラックが建ちはじめ、各所で闇市が開かれた。そこでは食料・衣料が取り引きされ、群集が蝟集した。復員・戦災者らが闇屋・カッギ屋となり、列車の窓ガラスは悉くぶち破られた。敗戦が齎した生活と道徳の頹廢は甚だしく、戦争未亡人の氾濫（昭22、約56万）、性生活の混乱、淫売婦の横行（日比谷公園で夜の日米交歓）、飢餓線上をさまよう浮浪者の群（東京の餓死者一日平均6人、「米よこせ」デモ宮城へ押しかける。失業者推定447万）、戦災孤児の彷徨・詐欺・誘拐・賭博・横流し・強盗・殺人等、占領下の昭和二十年九月から約一年間にかけて、一切の権威は失墜し、旧秩序は悉く崩壊しつつあった。食糧事情の悪化とインフレーションによる社会の混乱と窮乏とは、その極点に達していたといえよう。

軍閥・財閥・地主等の前近代的なものが凋落し、マッカーサーによる民主主義的政治改革が次々に行なわれた。「検閲」の廃止、「治安維持法」の撤廃、政治犯の釈放、共産党の合法化、労働組合の結成、スト権の獲得、そして農地改革が一片の指令で断行された。

こうした世相の中に生きる青年の悩み——「トカトントン」はこれをどのように把握しているであろうか。

2

昭和五年、コミニズムの実践運動から脱落した太宰は、同志はもとより自己の倫理感さえ裏切ったという激しい罪の意識に責めさいなまれた。その「心にもない驕慢の擬態」（虚構の春）は裏切り者が「刺し殺される日を待ってゐる」姿勢でもあった。が、敗戦と同時に古い日本は滅んだ、革命近し、と期待した太宰は、終戦後間もなく青森地区の共産党再建会議に出席している。その唯物史観の立場は「十年後も変ることなし」と宣言していた彼である。

しかし、昭和二十年十月から「河北新報」に連載していた「パンドラの匣」は途中から急に打ち切ることになった。その明い肯定的な自己の姿勢に堪えられなくなったのである。というのは、それまで彼が期待していた「新しい現実」は全く予想を裏切ったひどい醜いものであった。古いものは滅びるどころか、又しても新しい指導者となって時代に便乗しつつあった。それまで戦争に協力的だった左翼文学者までが顔面もなく民主主義を称え始めていた。このような「新しい現実」に接した太宰は、甘い期待をかけすぎていた自分自身を激しく嫌悪した。何もかも米国製の新日本に対して絶望的な予感がした。新現実に対する絶望的な再認識——たとえ一時的にもせよ、平和や自由に酔い、革命を夢みた自らのならしなさにあきれ、彼は激しい自己嫌悪に陥った。自由主義・民主主義・それに共産主義ま

でが米国製の既成服を着せられてはいないか。彼は啞然とし、唾棄し、やがて自己の外部に対しては反逆を、自己の内部に対しては破壊を誓った。こうして「バンドラの匣」「津軽通信」などにみられた明るさは漸くその影をひそめ、「冬の火花」(昭21・6「展望」)、「春の枯葉」(昭21・9「人間」)から「親友交歓」(昭21・12「新潮」)以後の数多い短篇には、皮肉な冷笑や、揶揄または諷刺の傾向が著しくなっている。

「トカトントン」の一年前の発表作に「親友交歓」(改造)及び「男女同権」がある。前者は疎開中の作者の家に、自ら小売時代の喧嘩友達と称する元小作人がやって来る。久しぶりにクラス会をやるとういうのである。作者が秘蔵のウキスキーを出して歓待すると、一人でがぶがぶ平らげ、家族の恐怖と嫌悪とをしりぬにさんざん気焔をあげる。丸半日も居すわった末、さていよいよ引きあげる時、さらに取っておきの一本までも恐喝的にまきあげる。そして作者がこの男を女関まで送って出た時、

……彼は私の耳元で烈しく、かう囁いた。

「威張るな！」

これが有終の美を飾る一言であった。被害者の作者はその時の印象を「私には強姦といふ極端な言葉さへ思ひ浮んだ」といつている。ここには敗戦当時の混乱のさ中における青白きインテリーの不安と孤独がある。敗戦と占領という中で、この作家だけでなく、まさに日本そのものが強姦されていたともいえよ

うが、無力なもの力弱いものの哀れな溜息まで聞える。がしかし、太宰の旺盛な喜劇的精神は、この作品をあくまで「人間の戯画化」におき、ユーモアまで漂わせている。ここには農地改革が決して農民自身の手でかちとられたものでないことを暗に諷刺している。

後者即ち「男女同権」は一老文学者が地方の講演会にかつぎ出されて、その女性観を語るという体裁。ここでは女性のエゴにさんざん傷めつけられどおしだった主人公の述懐を通じて、「男女同権」を揶揄している。

3

さて「トカトントン」であるが、これを次のような表によって示してみよう。(次頁参照)

これが悩める青年の手紙の内容をなしている。一切のものを否定する虚無索莫の音——幻滅・不信・虚脱の音——それがトカトントンの幻聴である。ここには敗戦当時のニヒルな虚脱感が具体的な幻聴によって見事に表わされている。トカトントンは当時の全ての人々が聞いていた音に外ならない。^{註2}

幻聴に悩む男——ニヒルというよりは虚脱に近い、この病的な男に対して、そのような手紙を受け取った作家は次のように返答した。

拝復。気取った苦惱ですね。僕は、あまり同情してあないんですよ。十指の指差すところ、十目で見るところの、いかなる弁明も成立しな

項目	事件		1. 終戦の日		描	写	心境	題材	備考				
	音 (幻聴)	音 (幻聴)	玉音 A、	金槌 B、						音 (幻聴) を聞く直前	音 (幻聴) を聞いた直後		
音	3、 海辺 のラ ンデ ブー で聞 えた 音	2、 局で 聞え た幻 聴	1、 銭湯 で聞 えた 幻聴	玉音 A、 金槌 B、	昭和二十年八月十五日正午……兵舎の前の広場に整列させられ……陛下みづからの御放送だといふ、ほとんど雑音に……ラジオを聞かされ……若い中尉がつかつかと壇上に駆けあがって…… (註) 1、 (敗戦の衝撃で暗澹たる心境でいる時)	幽かに聞えるトカトントン	遠くから幽かに聞えるトカトントン	薄暗い湯槽の隅で、じやぼじやぼお湯を掻きまはして動いてある一個の裸形の男……ブーシキもゴーゴリも、外国製の歯ブラシの名前やうに味気ないもの……あまりのばかばかしさに呆れ、うんざりして……	何もかも一瞬のうちに馬鹿らしくなり……自分の部屋に行き、蒲団をかぶって寝てしまひました。	花江さんのすぐうしろに、かなり多量の犬の糞があるのをそのとき見つけて、……波はだるさうにうねって、きたない帆をかけた船がよろよるうと、とほって行きます。「それちや、失敬。空空漠漠たるものでした。……ばかばかしい。腹がへった。……」	不安 感、 不信 感、 幻滅 感、 虚脱 感、 疑	(恋) 愛) 人間 ・社 会に 対す る猜 疑	雑音の 猛威、 「よろ よう」 虚脱 感の象 徴
聴	3、 海辺 のラ ンデ ブー で聞 えた 音	2、 局で 聞え た幻 聴	1、 銭湯 で聞 えた 幻聴	玉音 A、 金槌 B、	昭和二十年八月十五日正午……兵舎の前の広場に整列させられ……陛下みづからの御放送だといふ、ほとんど雑音に……ラジオを聞かされ……若い中尉がつかつかと壇上に駆けあがって…… (註) 1、 (敗戦の衝撃で暗澹たる心境でいる時)	幽かに聞えるトカトントン	遠くから幽かに聞えるトカトントン	薄暗い湯槽の隅で、じやぼじやぼお湯を掻きまはして動いてある一個の裸形の男……ブーシキもゴーゴリも、外国製の歯ブラシの名前やうに味気ないもの……あまりのばかばかしさに呆れ、うんざりして……	何もかも一瞬のうちに馬鹿らしくなり……自分の部屋に行き、蒲団をかぶって寝てしまひました。	花江さんのすぐうしろに、かなり多量の犬の糞があるのをそのとき見つけて、……波はだるさうにうねって、きたない帆をかけた船がよろよるうと、とほって行きます。「それちや、失敬。空空漠漠たるものでした。……ばかばかしい。腹がへった。……」	不安 感、 不信 感、 幻滅 感、 虚脱 感、 疑	(恋) 愛) 人間 ・社 会に 対す る猜 疑	雑音の 猛威、 「よろ よう」 虚脱 感の象 徴

I. 兩 後

<p>4、デモ (ある日労働者のデモを見て) 生半撥刺、なんとまあ、楽しさうな、……伸びて行く活力……胸がいばいになり、涙が……ああ、日本が戦争に敗けてよかった……生れてはじめて真の自由といふものの姿を見た。……自分の行くべき一条の光り路がいよいよ間違ひ無しに触知せられたやうな大歡喜の気分になり、涙が氣勢よく頬を流れて、……その薄明の濛濛と動いてゐる中を、真紅の旗が燃えてゐる有様を、ああその色を……めそめそ泣きながら、死んでも忘れまいと思つたら、</p>	<p>遠くから幽かに聞えるトカトントン</p>	<p>もうそれっきりになりました。……虚無など簡単に片づけられさうもないんです。……虚無をさへ打ちこはしてしまふのです。</p>	<p>幻滅感、不信感、(政) 治、労働運動、不信、描写の態度は揶揄的</p>
<p>5、運動後聞えた (駅伝競走の選手に無欲無報酬の美しさを感じ) 実に異様な感激に襲はれたのです。……虚無の情熱だ……(そこで自分も局員達を集めてキヤッチボールをして) へとへとになるまで続けると、何か脱皮に似た爽やかさが感じられ、これだと思つたとたん</p>	<p>トカトントン</p>	<p>虚無の情熱をさへ打ち倒します。</p>	<p>ニヒルな(運動) スポーツの否定 ※</p>
<p>6、何をしても聞える (もう、この頃では、……いよいよ頻繁に聞え、(何をしても、何を聞いても聞える)……もう気が狂つてしまつてゐるのではなからうかと思つて……自殺を考へ……「人生といふのは、一口に言つたら、口調で尋ねてみました。「人生、それはわからん。しかし、世の中は、色と慾さ。」案外の名答だと思ひました。)</p>	<p>何をしても、何を考へてもトカトントン</p>	<p>この音のために身動きが出来なくなつてゐます。</p>	<p>病的(世) 俗悪の否定、ノイロ一ゼ気味?</p>

※この種の幻聴は、体力の消耗・疲労などで起る生理的現象(耳鳴りのようなもの)であろうか。そう考えると、1、の場合も、気温・温度・体温などの関係で貧血や耳鳴りなどが起るし、4、の場合の幻聴も激しい興奮などで起る生理的現象と考えられる。3、は実際の音であり、雑音の障害による窓のムードのぶち壊しである。

なお奥野健男は、「分裂性性格の太宰には、しばしば幻聴のかたちで超自我の命令があらわれたらしい。」(「太宰治」10頁)といつてゐる。

次に素材となつてゐるものについて考えると、1は、「ペンドラの匣」がそれにあたり、3、は「雌」なる女性に裏切られ通じた太宰の女性に対する不信心。4、は敗戦の傷痕も未だ癒えない頃、戦時中の自らの言動も棚に上げて、革命騒ぎに血道をあげている連中を諷刺。6、は資本主義の俗悪さに対する否定。

なお「トカトントン」以外のオノマトベとして「じやばじやば」があり、その他擬態語の「うんざり」「よろよろ」など、いずれも快感を表わすものに使われていない点が特に注目し値する。

醜態を、君はまた避けてゐるやうです。眞の思想は、叡智よりも勇氣を必要とするものです。マタイ伝十章、二八、「身を殺して靈魂をこころし得ぬ者どもを懼るな。身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。」この場合の「懼る」は、「畏敬」の意にちかいです。このイエスの言に、霹靂を感じる事が出来たら、君の幻聴は止む筈です。不展。

作家の返事にはかなり批判的な態度がみられる。君の苦惱はどうも生ぬるい。虚無とか絶望とか云っている間はまだ余裕のある証拠だ。もはやいかんともなし難い絶体絶命のところまで到らねば本当ではない。もっと勇氣を出して醜態をさらけ出せ、死をもあえて辞せぬ勇氣を——と云う。

(註) 1 なおこの文章は「定本太宗治全集」によると、次のようになっている。

「聞いたか。わかったか。日本はポツダム宣言を受諾し、降参をしたのだ。しかし、それは政治上の事だ。われわれ軍人は、あく迄も抗戦をつづけ、最後には皆ひとり残らず自決して、以て大君におわびを申し上げる。自分はそのつよりそのつものであるのだから、皆もその覚悟をして居れ。いいか。よし。解散。」

全集、新潮文庫本では右の傍線部が省略されている。
(註) 2 外村繁『トカトントン』「人間」昭二二、四、六八頁、創作短評には、「誰の耳にもトカトントンは聞えて来るのである。」とある。

幻聴に悩む青年に対して、早速手紙で応えた作家の言葉は、抑捺とも激励ともとれる。がしかし、青年といふ作家といい、要は作者自身の分身に外ならない。この種の手法は芥川が好んで用いたところである。太宰はこの青年の手紙の中で次のように言わせている。

さうしてそれから、(私の文章には、ずるぶん、さうしてそれから、が多いでせう?これもやはり頭の悪い男の文章の特色でせうかしら。自分でも大いに気になるのですが、でも、つい自然に出てしまふので、泣寝入りです)さうしてそれから、私は、コヒをはじめたのです。……こうした韜晦性は「道化の華」以来とも云える。芥川と同じように、肉声を極力避けようとした彼の「含羞の文体」(奥野健男「太宗治」134頁)とも云えようか。それにしても、この「作家」の言葉は千鈞の重みをもつてよく生かされている。それは太宰が自分自身を鼓舞し、自らに鞭うつ声でもあった。ニヒルの音は彼自身の耳に鳴り続け、「イエスの言葉に霹靂を感じる事が出来たら」と願ったのは、正に太宰自身であったろう。なぜなら、この作品にみられる主人公は、錯乱あるいはデカダンとはかなり距りのある一種のノイローゼということが出来る。作者は主人公の虚脱と混迷とを通じて、最後に、自分は果して「若い人たちのげんざいの苦惱」を書き得たかどうか——という反省を行なった。その反省と自己批判を含めて、この「無学無思想の作家」の言葉をつけ加えたのであろう。

この作品のモチーフは既に掲げた通りである。その描写は逆

説くと云つてもよいような皮肉なものを漂わしている。作者の人間や社会に対する幻滅と不信の白々しい笑いが漏れている。

昭和二十一年十一月十四日、三鷹の旧居に帰った太宰は猛然として創作活動を再開した。同年の暮から翌二十二年の正月にかけて書きあげたものが、例の傑作「ヴィヨンの妻」(昭22・3、展望)である。

泥酔放蕩の詩人の妻が、その身の上を語るモノローグに、お店のお客さんばかりでなく、路を歩いてゐる人皆が、何か必ずうしろ暗い罪をかくしてゐるやうに思はれて来ました。

と語っている。罪なくして生きて行けない時代の暗さ！ 純粹な善への希求のはかなさと自由への恐怖感が、あたかも「意志と感情のまつたく無い、風の透るような異様に軽い言葉づかい」(奥野、前掲書、120頁)で書かれてゐる。このあたりから、もはや常人とは思えないものが漂つてゐる。

「ヴィヨンの妻」以後の太宰、つまり津軽の生家から三鷹の旧居に移つた以後の太宰は、たしかにトカントンの音を聞き続けていたのであろう。嘗ては俗悪と対決して「高尚な虚無の心」(富嶽百景)を愛し、「遊民の虚無」(東京八景)に浸つた彼は、一切の俗流と対決しようとして必死に戦つた。しかし、敗戦後の厳しい現実に対処する彼の反逆の姿勢は「へんに快談じみたもの」(人間失格)に近かつた。現実にとともに対決するだけの気力も体力も不足してゐたやうである。

がしかし、「訴えの作家」太宰の「溜息のような諧調」、どこ

太宰治「トカントントン」について

かにみられる「一種独特のさわり」^註——それらはさながら雑音にかき消された玉音の哀調のように、切々として人々の心に訴えた。一切の権威が激しく音を立てて壊滅しつつあつた敗戦時の騒音のさ中であつて——。

(註) 三枝康高「太宰治とその生涯」209頁。

5

それにしても、この作品のすべては「トカントントン」によつて象徴されているように思える。かつてアナキズムの詩人たちが嵐のような激情に身を投じたのに対して、この作品にみられる叛逆の姿勢は、一切の激情を否定しざるニヒルな、投げやりな、傷ついた意志であり、もはや青春の血を忘れた冷やかな感情であり、デカダンに陥るほどの暗い醜い現実を、トカントントンと描くことであつた。

作者はこの作品を通じて、戦後の平和や自由の何たるかを皮肉つてゐる。現実に対する幻滅と悲哀を感じてゐる。世のすべての秩序に背をむけ、その無秩序を嘲つてゐる。——そうした態度がこの「トカントントン」のおどけたやうな、ふざけたやうな、冷笑するやうな韻ぎとなつてゐる。

がしかし、「作家」はこの「ゲヘナ」の声におびえる者を「氣取つた苦惱」として一蹴し、「身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者」を畏れよという。「トカントントン」に屈せず、「トカントントン」の生ぬるさを突破してこそ、はじめて「真実の苦惱」た

り得るといのであろう。

一切の美意識を否定しざる雑音の猛威とその障害を越えんとする芸術的苦惱——それが「トカトントン」のテーマである。

ここには人間太宰の苦惱がある。その苦惱は「恍惚と不安の交錯」(東京八景)から「幻滅と不信の暗い翳」に変わっている。自分の周囲の荒涼に堪えかねた絶望の姿勢がある。

がしかし、その絶望は正面切つて吐露されるよりも寧ろ、この小説の措辞や「トカトントン」のオノマトベにもみられるように、一見皮肉な逆説と陽気を装う頓晦の姿勢から滲み出てくるかのである。作者が屈折した表現をとればとるほど一層切々たる韻きをもって読者に感じられるのではなからうか。

最後に蛇足としてつけ加えておく。

一読者から「トシカチ」の音を借用した太宰は、それを「トカトントン」と改めた。「トシカチ」は木・石・金など、堅い物体の衝突音である。金槌の音を「トシカチ」といったのは頷ける。が、それは強く鋭い衝撃ではあっても、単発的というか音の断絶があり、余韻がない。それに較べると、「トカトントン」

ン」は同じ衝撃音でも断続的・反復的であり、ひ弱なようではなやかな感じの中に無気味な余韻がある。どこからともなく聞える冷たい虚無の声に圧せられ、慄える太宰の弱い乱れた心臓の音のような旋律とも云えよう。そのけだるいような韻きには、滑稽よりも寧ろ哀れさが感じられ、そのとぼけたような調子からは皮肉な冷笑が漏れているように思える。

最後に、「太宰はなぜこのようなオノマトベを用いたのか？」という質問に答えておく。彼はこのオノマトベによって自らの内面的なものを表わそうと意図したものに違いない。否、そうする以外に表わし得ないものをそう表わしたまでである。通常の言語がもつ知的概念的な説明よりも、オノマトベ——記号が「もの」そのもののもつ直截的具体的なイメージをさそう——を通じて、この作品を書かざるを得なかった暗い醜い現実なり、作者自身の白々しい空しい心境なり、時代特有の生命の虚脱感ともいへば、暗い翳を、皮肉と諷刺と揶揄と憐愍の情とをもって表わしたものであろう。

付記。現代文学におけるオノマトベの用法には、作品の主題や作家の作風に関連する重要な用例があり、今はその一例としてこの作品を取りあげてみたのである。